

マリンビジョンNewsは、サロマ湖地域の1市2町で構成するマリンビジョン協議会が、自然環境と共生した明るい未来を創造する漁村づくりに向けた活動を紹介する広報紙です。

サロマ湖の未来を考える

1月9日佐呂間町コミュニティーセンターで「氷海域の技術と持続可能な地域づくり」をテーマにサロマ湖シンポジウムが開かれ、研究者や地元漁業者など約100人が出席しました。

北海道大学大学院とサロマ湖養殖漁業協同組合、サロマ湖マリンビジョン協議会が主催し今年初めて開かれ、環境や資源を守りながら継続的な漁業の発展について、社会・文化・技術・環境などの分野で活躍する8人の講師から研究発表があり、パネルディスカッションでは堀前佐呂間町長、杉森養殖組合長、加藤前養殖組合常務をパネラーに、湖内ホタテ養殖の歴史や流氷の流入を防ぐ「アイスブーム」の整備に至る経過が披露され、最後にサロマ湖の氷について長年研究を重ねられた北海道大学佐伯総長が総括講演を行って閉幕しました。



地域起しは女性から・・・

2月15日ホテルポールスター札幌で平成21年度地域マリンビジョン推進会議が開催され、浜中町の地域資源こんぶを活用したまちおこしの事例やサッポロ・マルシェ・プロジェクト協議会の生産者と消費者・札幌と地域を結ぶ事業企画、徳島県上勝町の地域資源を活用した住民参加型の起業支援事例、おさかなマイスターによる魚食の取り組みと関東から見た北海道の水産業について基調講演があり、道内漁協女性部の活動事例の報告に続き、北海道大学大学院山下准教授をコーディネーターに「マリンビジョンにおける女性の取り組み」と題してパネルディスカッションが行われ、女性部等による地域資源を活用した商品開発や起業への取り組みが地域振興に果たす役割について活発な議論が交わされました。



サロマ湖産カキの守護神

冬の味覚カキは鍋など食材として人気が高く、サロマ湖全体では年間約950トンのカキ貝が水揚げされますが、このカキ貝を安心して食べてもらうためサロマ湖養殖漁業協同組合では湖内のノロウイルスの分布状況を把握する調査を毎年続けています。

同組合では、11月から翌年の3月まで約5ヶ月間に渡り結氷した湖面や河川に穴を開けサンプルの採取を行っている、吹雪で何も見えないツルツルの氷の上で時には開水面に落ちそうになる危険を伴いながら苦勞して採取したサンプルを栄浦地区の研究室に持ち帰り、ろ過やRNAの抽出、DNAの合成などを経て「リアルタイムPCR方法」によりウイルスを数値化し、分布する時期や場所、水質等のデータと合わせて蓄積されノロウイルスに汚染されないカキ貝を生産する技術の確立に向けた試験研究を行っています。



厳寒の氷下待ち網漁

一面雪と氷に覆われたサロマ湖で小型の定置網を使った「氷下待ち網漁」が行われています。

漁師さんらは船をスノーモービルに乗換え、あらかじめ氷を切り取り仕掛けておいた網を引き上げると、チカやキュウリウオ、カレイなど旬を迎えた魚がピチピチと飛び跳ねながら水揚げされ、地場産の鮮魚少ないこの時期の店先に並びます。

例年は3月下旬まで行われる漁ですが、今年は氷が薄く暖かい日も続いているため漁期は短くなりそうです。



発行 サロマ湖地域マリンビジョン協議会

2010.2.26

編集 サロマ湖地域マリンビジョン協議会事務局

〒099-6404 湧別町栄町112番地の1

湧別町総合支所産業振興課内

Tell 01586-5-2211・Fax 01586-5-2283

Mail sangyou@town.yubetsu.lg.jp

